草の芽句会だより

NO,187
24、4、4

清明の古城美し雨上り　範子
思い出の謡曲会の花の場所
五部咲きの花の句会となりにけり

見返り坂雨後の桜の下向きて　純子
パラソルをひろげて花見客を待つ
青春切符東へ旅する友の春

標準木満開となり城の山　貞子
城山の桜待ちたる人多し
峰々に雲のかかりて春の雨

春麗ら友と選びしネックレス　禮子
大手門くぐれば花の天守かな
席空けて友呼び寄せり花の城

咲き充ちて散る気配なし花こぶし　剋子
師の軸に掛け換え日脚伸びにけり
水仙の上りかまちに届きたる

春落葉しまい忘れの竹箒　節子
見渡せば黄色一色菜の花忌
落椿風に吹かれて傷ましき

出席者　川原　森　馬場　吉崎　小山
投句者　氏家

桜は満開に近い。何十年もの間、毎年見てきた城山の桜が、今年も私たちを迎えてくれた。草の芽が長く続けてこられたのは、「そこにお城があったから」の一語に尽きる。春は桜、夏は緑、秋の紅葉、そして枯れ切った冬でも花を咲かせる草花の場所を私たちは知っている。振り返ってみると長い歳月、私たちと同様に桜の木も年をとった。枯れた枝を伐り落とされた老木があちこちに見られるのである。「私達と同じように年をとったね」太い幹だけになった老桜に心の中で話しかける。「最後まで頑張って咲いてね」と。

私たち仲間も全員が八十歳を過ぎた。もう天守閣へ上る元気はないが、秋には二の丸に咲く十月桜を見たいと思っている。残る人生、精いっぱい楽しみたい、私達の合言葉である。